

「子どもを支えるために ～子ども理解を考える～」

研究者 生徒指導・特別支援教育部 専門主事 染川あゆみ、山岸 俊朗、市村 宣幸、小林里恵子
研究協力校 高森町立高森北小学校

I 研究テーマ設定の理由

私たちは、子どもや保護者・教職員の教育相談、教職員対象の研修講座や教職員校内研修会サポート事業を行っている。その中で、子ども、保護者と教職員が感じている課題に、それぞれ立場の違いはあるものの、子どもへの理解と指導・支援をどのようにしたらいいのか、という共通の課題があるのではないかと感じる事が多くあった。そこで、それらの課題を解決するための手立てとして、子ども理解や指導・支援に関する論を基に、保護者と前向きな連携をしながら、子どもを理解し、チーム（校内外の関係者）で共通理解を図りながら、子どもと向き合うことが必要なのではないかと考えた。また、どの先生方にも実践していただきたい基本的なポイントを整理し、リーフレットにまとめたいと思い、本研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 生徒指導・特別支援教育部の研修講座等における情報収集

(1) アンケート調査

- ・目的 教職員が抱えている課題を明らかにし、研修講座や調査研究に役立てるため
- ・対象 13 研修講座、教職員校内研修会サポート事業校の教職員
- ・回答者数 350 名（各項目ごと複数回答）
- ・内容 教職員からの意見、要望が多い校内外連携、保護者対応、児童生徒への対応に関する項目でアンケートを作成した。

(2) 研修講座を受講した教職員が記入した研修講座終了時の振り返り

- ・感想・意見などを「校内外連携」、「保護者対応」、「子どもへの対応」に分類し、感じている課題を明らかにする。

(3) 教職員が感じている課題の傾向より

【校内外連携について見えてきた課題】

- ・問題に対する教職員の意識の差、保護者や本人の訴えに対する理解の差
- ・子ども理解と指導・支援の具体策の検討（個への対応と集団指導との兼ね合い）
- ・共通理解の方法と時間確保

【保護者対応について見えてきた課題】

- ・保護者との関係づくり、連携ができていない。
- ・多様な価値観による子どもの理解、学校教育に関する認識の違いから、子ども、保護者、学校のそれぞれの立場での思いや考えによる行き違いを生むことがある。それが、子どもへの指導・支援に関するトラブル増加の要因につながることも多い。

子どもへの対応について見えてきた課題】

- ・多様な子どもへの理解とその子への個に応じた指導・支援の具体的方法と集団による一斉指導のあり方について学びたい。
- ・教職員の問題意識の差と理解の差が、多様な子どもへの理解と指導・支援の課題になっている。

2 保護者（子ども）の困りの傾向 ～過去の教育相談の事例の分析より～

当部における過去の教育相談事例から「主訴」や「相談者の願い」、「私たちが求められていること」についての傾向を探った。

【主訴や願いから見えてきた課題（困り）】

- ・一人一人の子どもの発達段階や強み、保護者の抱える課題が異なっても困りは共通している。
- ・学校への批判・否定ではなく、どの保護者も我が子が笑顔で安心して過ごせるように願い、我が子への理解と指導・支援に関する教職員への相談や依頼をどのようにしたらいいのか困っている。
- ・子どもが新たな進路先を選定し決定に関する不安、進学先への子ども理解と指導・支援の引継ぎをどのように相談し、依頼したらよいか困っている。

3 リーフレット作成にあたって

私たちは、見えてきた課題の中から「教職員の問題に対する意識の差、子どもや保護者からの訴えについての理解の差」に着目した。なぜなら、この課題が、

- ・子どもの現象面に課題を感じても、その背景を探り、分析するまでの理解がされにくい。
- ・子どもの背景に合った指導・支援より教職員の経験に頼る指導・支援になりやすい。
- ・専門的な見方や情報に基づいた指導・支援が実践できにくい。

といった要因になっているのではないかと考える教職員が多いことをアンケートや研修の振り返りの記述から知ったからである。これらの課題を解決するためには、どの先生にも実践していただきたい基本的なポイントをまとめたリーフレットを作成し、活用していただければと考えた。作成したリーフレットの内容については、以下の三点である。

(1) 「子どもを知る」から指導・支援へ

- ・子どもの言動を細かく観察することから問題となる行動につながるきっかけを探る。
- ・子どもの言動の背景（特性）を明らかにする。
- ・子どもの言動の背景（特性）に応じた（ニーズに合った）指導・支援につなげる。

(2) チーム(校内外の関係者)での共通理解～困りを抱え込まない、抱え込ませないために～

- ・共通理解を図るための観点と情報を視覚化させた支援会議
- ・関係機関からの助言と協力（⇒子どもの背景を探るときから連携する）

(3) 保護者との前向きな連携～子どもを真ん中にして、保護者と同じスタンスで～

- ・子どもの願いや困りの理解と共有
- ・子どもの変化や成長の姿を共有
- ・保護者の気持ちに傾聴

4 研究協議会で「子ども理解」を深め、リーフレットを活用するために実践したこと

(1) リーフレットにある「見通しをもちにくい」「目と手の協応が難しい」などの疑似体験

子どもの困りを実際に理解するための疑似体験をした後、どのような指導・支援が必要か話し合った。

- ア) 折り紙を一人一枚渡し、言葉のみの指示で「風車」を折る。
- イ) 軍手2枚 or 3枚を利き手に指先1cmの遊びをつくってはめ、文章を罫線に書き写す。
- ウ) 書かれている文字の言葉を当てる。

(2) 子ども理解のための観点をチェックシートで行う方法を提案

子どもの背景(特性)を学習面、行動面、対人関係などの観点で、教職員のとらえと子どもや保護者の訴えの両面からチェックし、多角的・多面的、総合的に理解する方法を提案した。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究協議会の参加者の感想より

- ・分科会の間、ずっと学級にいる児童の姿が思い浮かんでいました。その子とはぶつかることも多い毎日ですが、見方を変えてみると、その子の言葉や行動は苦しさを伝えるメッセージのように思えてきました。数多くのトラブルに対応し、一つひとつを解決してきたつもりでしたが、一番大切なその子自身が抱えるものを見てこなかったかもしれません。意識改革のきっかけをつくってくださり、ありがとうございます。また、明日からがんばります。
- ・子どもをよく見て、理解することを改めて強く感じました。自校でも、子ども理解が全職員共通になるように、来年研修をしていきたいと思います。また、相談にのってください。
- ・日々、子どもの対応で悩んでいますが、どんな視点で子どもを見ていけばよいかかわからず解決できないままでした。今日、教えていただいたことを実践し、子どもを支えていけるようにがんばりたいと思います。

2 子どもや学校現場に軸足を置いて

私たちは研究を進めながら、多様な子どもへの理解には、今まで以上に子どもを多角的・多面的に見る目をもたなければ、子どものための指導・支援へとつながらないことや、どの子にとっても有効な手立てがあることを学んだ。また、保護者との連携やチーム(校内外の関係者)での共通理解を図りながら、子どもの現象面のみにとらわれず、そうせざるを得ない子どもの立場や思いを知り、寄り添うことの大切さを改めて考えた。今後も今年度の研究を基に、子どもや学校現場に軸足を置いた研究を行っていきたい。

* 子ども理解………子どもの気持ち(思い、願い、困りなど)、立場(置かれた状況、見方、考え方、考える方法、傾向など)がわかること

* 子どもを知る………一人一人の子どもの言動の背景にある気持ちや傾向を把握すること

* 子どもをとらえる…子どもを視野、知識の中に入れてみる(観る(観察…実態を知るために注意深く見ること。その様子を見て、変化を記録すること)、看る…子どもの面倒をみる、世話をすること)

* 本研究のアンケート調査において、平成17年度佐賀県教育センター「プロジェクト研究」教育相談のアンケート項目を参考・引用させていただきました。参考・引用に際し、快諾して下さった佐賀県教育センターの皆様にご挨拶申し上げます。